

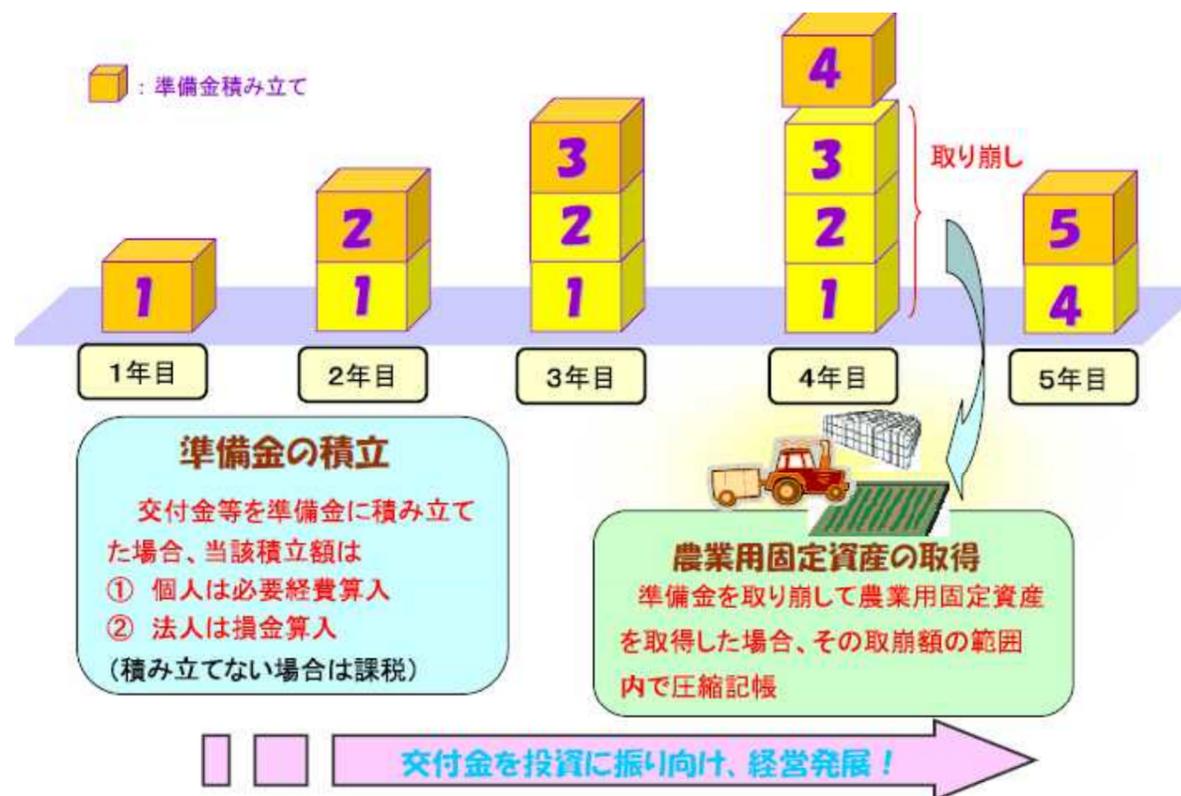
農業経営基盤強化準備金制度の創設！ — 担い手に対する新たな税制措置 —

平成19年度の確定申告から農業経営基盤強化準備金制度が創設されます。この制度は認定農業者や集落営農等の担い手を対象とした特例措置であり、担い手の経営発展を目的とするものです。

1 農業経営基盤強化準備金制度の概要

- 品目横断的経営安定対策等の交付金を準備金として積み立てた場合、その積立額を必要経費(法人は損金)に算入することができます。
- 5年以内に準備金を取り崩して、農地や機械を取得した場合、圧縮記帳をすることができます。

図1 農業経営基盤強化準備金制度のイメージ



※圧縮記帳とは、取得資産の帳簿価格を一定額まで圧縮し、その圧縮額を必要経費に算入する方法です。したがって、圧縮した分だけ課税所得が減少し、実質的に非課税となります。

2 農業経営基盤強化準備金制度による減税効果

認定農業者の場合の減税効果を下図に示しました。この例では、1年間で30万円、5年間で150万円の節税効果があります。

図2 農業経営基盤強化準備金制度の減税効果

認定農業者 農林さんの場合	特例の適用あり	特例の適用なし
農業収入合計金額 A (B + C)	900	900
うち農産物販売額 B	650	650
うち交付金等収入額 C	250	250
必要経費金額 D (E + F)	780	530
うち農業経営費等 E	530	530
うち農業経営基盤強化準備金繰入額 F	250	0
課税対象所得金額 G (A - D)	120	370
税額 (G × 12%※)	14	44

※税率は総合課税を勘案し所得税率12%で算出。農外所得、各種控除はないものと仮定し単純化。

1年間で30万円の減税効果

5年間の積立額 1,250万円を取り崩して 1,500万円の農業用固定資産を取得した場合

5年以内に当該準備金を取り崩して 農業用固定資産を取得しなかった場合

取得した農業用固定資産 1,500万円
 固定資産の帳簿価額 250万円
 収入(益金) 準備金取崩益 1,250万円
 必要経費(損金) 固定資産の圧縮記帳 1,250万円

収入(益金) 1年目に積立てた準備金の取崩益 250万円
 1年目に積立てた250万円は収入(法人は益金)として課税対象
30万円の納税 (250万円 × 12%)

取得した固定資産を圧縮記帳し、準備金取崩額の範囲内で必要経費(法人は損金)算入することで、準備金取崩益と相殺

3 農業経営基盤強化準備金制度の注意点

- この制度の対象となるのは、①認定農業者、②特定農業法人、③特定農業団体、④③に準ずる組織です。
- この制度の対象となる交付金は、①品目横断的経営安定対策(ゲタ対策及びビナラン対策)、②米政策改革推進対策(産地づくり交付金)、③農地・水・環境保全向上対策(営農活動支援のみ)です。
- 平成20年の確定申告(平成19年度分の所得)は青色申告で行う必要があります。したがって、これまで青色申告をしていない人は**平成19年3月15日までに税務署へ「青色申告承認申請書」を提出する**必要があります。

新奨励品種「まっしぐら」栽培のポイント

平成18年から作付けが始まった新奨励品種「まっしぐら」は、平成19年から管内全域で栽培されます。良質・良食味米の安定生産のため、品種特性を十分理解して栽培に取り組みましょう。

表1「まっしぐら」の品種特性(「ゆめあかり」対比、平成18年管内調査ほを参考)

①苗の生育	葉色が淡く苗長が長い。高温で徒長しやすい。
②本田の生育	葉色が淡く、出穂期まで草丈が長い(葉は細い)。
稈長	やや短い「短強稈」。
穂数	やや少ない(徒長苗では初期分けつがより少なめになる)。
③出穂・成熟期	3～4日遅れる。
④障害型耐冷性	「やや強」で1ランク劣る。
⑤いもち病抵抗性	「強」で2ランク強い。多肥栽培ではやや抵抗性が劣る。
⑥収量性	やや高く5%程度増収。玄米粒が大きく千粒重は重い。
⑦玄米品質	並であるが、着籾数過多で未熟粒(充実不足)が発生しやすい。
⑧食味	タンパクは並であるが、食味はやや優る。

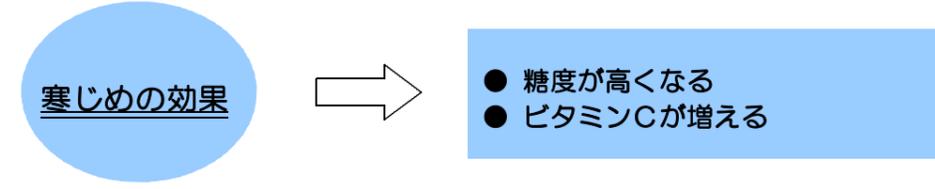
表2 平成19年の栽培に当たっての注意点

<p>①穂発芽性が「難」(種子の出芽が揃いにくい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○十分に浸漬期間を取り、適正に催芽を行う(必ず鳩胸を確認)。 ○芽の伸びが悪い場合は催芽時間をやや長めとする。 <p>②苗の葉色が淡く、高温で徒長しやすい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○適正な播種量とする。育苗の温度・水管理を徹底し徒長させないようにする。 <p>③施肥量は地域の施肥基準を守る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○施肥量は「ゆめあかり」並とする。 ○多肥は籾数過大につながり、品質が低下(青未熟、充実不足の増加)する。 <p>④本田では草丈が長く葉は細長い。生育期を通して葉色が淡い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○葉色が淡いので、追肥は早すぎず適期に施用する。 <p>⑤耐冷性がやや弱い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○低温に弱い穂ばらみ期は深水管理で保温する。 <p>⑥出穂期・熟期が遅い。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○登熟が遅れやすい地域では適期(5月20～25日まで)に田植えをする。 ○出穂後も適正な水管理で登熟の促進を図る。 <p>⑦刈り遅れると未熟粒が増加しやすい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○積算気温で960℃(穂の基部にやや青みが残る、80%程度の籾が黄化)～1200℃が刈取りの目安。 	
---	---

躍進する東青の「冬の農業」

■ 寒じめ菜とは... ?

植物は、寒さに遭うと糖類を蓄積して凍結から身を守ります。寒じめ菜とは、東北地方の露地やハウスの開放栽培で真冬の寒さにあたって、甘みやビタミンが豊富になった品質の良い菜っ葉のことです。最近の研究では、ほうれんそうは深さ10 cmの地温が8℃以下になると、根の吸水量が減り糖やビタミン類の含量が高まることが明らかになりました。



■ 寒じめほうれんそうの栽培方法



(ここまでは一般の栽培と同じ) (ここからは寒じめ栽培)

冬に野菜を作るには、普通は生育を促すためハウスを閉めて(寒じめしないで)育てます。しかし、寒じめ栽培は、12月までに出荷サイズに育てた後、①ハウスを開けてハウス内の地温を8℃以下に下げます。②この管理を2週間くらい続けると、糖度が高く品質の良い「寒じめほうれんそう」となります。厳寒期のハウス開放は雪のため大変ですが、地温が8℃以上に上がらないようにコントロールします。

きちんと寒じめをして、糖度表示!

▲1月19日「元気なかつちの味自慢・腕自慢」で糖度表示をして販売しました!

【参考】 寒締め野菜の高品質化シナリオの策定と生産支援システムの開発(2003年～、寒締めプロジェクト)より引用